

# 1950年代埼玉県における教育研究サークルの生成と展開 (1)

—川口教師の会を中心に—

山田 恵 吾 埼玉大学教育学部教育学講座

キーワード：1950年代、教育研究サークル、川口教師の会、斎藤晴雄、自律性

## はじめに

本稿は、1950年代の教育研究サークルの活動とその意義を明らかにするものである。具体的には、埼玉県川口市の川口教師の会（1954年発足）の発足の過程と活動内容を通じて、教員の教育研究のあり方について検討する。

1950年代の教師の教育研究に関しては、たとえば、大田堯編著『戦後日本教育史』が「『新教育』批判が頂点に達する五一～五二年には、その後、民間教育研究運動とよばれるようになる自主的な実践と研究の運動がさかんになった。同じ時期に、教職員最大の組織である日教組が、教育研究活動を開始し、以後二つの運動は相互に刺激し、支え合って日本教育の支柱となっていく。」<sup>1)</sup>とするように、各民間教育団体と日教組の活動を中心に位置づけてきた。そこでは、「逆コース」「教育反動化」と呼ばれる政府の教育現場に対する圧力と、それに対峙する教育運動という、「官と民」の対立図式を前提として論じられてきたといつてよい。

また、近年の教育情報回路研究の蓄積によって、教員の教育研究の背景・基盤として、第二次大戦後の中央・地方における教育会と教職員組合を軸にした組織の興廃、そこに介在する校長会の役割、新たに設置された各自治体の教育研究所の活動が明らかにされてきている。特に校長会の役割が明らかとなるにしたがって、教育会の機能・役割は、看板は異なれど、戦前・戦後を通じて継承されていたことが明らかにされつつある<sup>2)</sup>。

このような1950年代の多層的・重層的な教育研究の状況の中で、教員らの教育研究は如何に成り立ち得たのか。この時期に全国各地に発足した教育研究サークルに注目する理由はそこにある。

教育研究サークルに関して「とうてい知悉し得ない」としながらも、1950年代から1980年代にかけての「ある程度その動きを知り得る都道府県単位の民教をとりあげ、それを概観」したものと、大槻健『戦後民間教育運動史』に注目することができる。大槻は「運動の初期のころは、各民間団体はその運動方針の実現をはかるために、その観点から地域を選んで全国集会などを開いてきたが、それらの地域に各団体に所属するサークルや会員の数が増すにつれて、のちには、おのおのの所属する団体の枠を越えて、同一地域内のサークルや会員が相互に協力、連帯しあい、その地域の課題に立ち向かおうとする独自の集会などを開くようになっていった。」「このような地域を主体とした民間教育運動の展開が、各民間教育団体ごとにすすめられていた従来からの運動とならんで、日本の民間教育運動の重要な一翼をになうこととなっていった」と、民間教育運動としての独自の役割を評価している<sup>3)</sup>。ただし、大槻が「概観するにとどめざるを得な」かった地域の教育研究サークルの研究には、「民間教育運動の重要な一翼」の中身について解明すべき余地が大きく残されている<sup>4)</sup>。

地域の教育研究サークルに焦点をあてた先駆的な研究として、二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』(学文社、2007年)がある。1950年代に発足してから50年にわたって、子どもと地域にねざした社会科教育実践・研究の豊かな成果を全国に発信し続けた、教育研究サークルのありようを明らかにした研究である。教育研究サークルの事例研究として重要な成果である。ただし、上越教師の会は、いわゆる「民間社会科」の実践と教育を志向するサークルであり、研究者の関心も体制-運動の対立図式を前提とした、戦後の社会科教育実践における同会の意義の解明にある。それ故に、同会の実践と研究を、コアカリキュラム連盟(コア連)・日本生活教育連盟(日生連)等の中央の民間教育運動の地方展開の構図の中に位置づけようとする傾向が強い<sup>5)</sup>。

本稿が対象とする埼玉県のエドゥカシヨンの研究サークルに関しては、『埼玉県教育史』の叙述がある。「民間教育研究団体(教育研究サークル)」の項で「全国組織のエドゥカシヨン研究会(教科研)日本作文の会、歴史教育者協議会(歴協教)、日本生活教育連盟(日生連)等の影響や、二六年の日教組教育研究大会(日光)の開始に促されて本県でも二七年頃から地域の教育研究サークルが誕生した。」とされている。1955年に各サークルの「相互の交流と連絡を図るため」、埼玉教育研究サークル連絡協議会が発足したこと、県内サークルの活動内容が資料とともに紹介され、これらの運動に対して「のちに埼玉教組も協力したが、各サークルは自主独立の方針で運営された。」ことが指摘されている<sup>6)</sup>。通史としての叙述とすれば、これで十分であるとしても、教員の教育研究のあり方、とりわけその専門性と自律性を問題としたい本稿の課題に照らせば、これらのサークルが全国組織の民間教育団体の「影響」や日教組の教研集会の開始に「促されて」、のその中身こそが重要な検討事項となる。なぜなら、この叙述では、地域の教育研究サークルが中央の組織的運動の展開の結果として誕生したと受け取れるからである。先走って言えば、埼玉県における教育研究サークルは、「影響」「促されて」に解消されえない、独自のより豊かな内容を含んでいる。そして、そのことは、「自主独立」の中身、ひいては第二次大戦後の教員の活動、民主教育の実態と評価に関わる問題でもある。

このような関心から、本稿は教育研究におけるサークル独自の意義を、既存の教育研究団体や民間教育運動等との関係性に着目しながら明らかにすることを課題とする。なお、サークル自体の特性、とりわけ1950年代という時代的な特性や、集団・機能面での特性など、教育研究サークルの分析の視点については本文で検討する。

川口教師の会は、1954年に川口市内の小・中学校の教員らによって発足した教育研究サークルである。埼玉県内の教育研究サークルに埼玉教育研究サークル連絡協議会の発足を呼び掛け、その活動の中心的な役割を果たした<sup>7)</sup>。本稿では、川口教師の会の機関誌と活動記録を分析するとともに、事務局として会の活動を支えた斎藤晴雄氏(1931-2012年)への聞き取り内容に基づき、サークル活動の特質を明らかにすることにしたい<sup>8)</sup>。

なお、本稿では教育研究団体の呼称について、便宜上、①地方行政当局の統制下、あるいは介入のみられるものを「教育研究団体」、②地方行政当局の統制・介入はなく、中央組織もしくは全国的に組織的な拡がりを持つものを「民間教育(研究)団体」、③地域(基本的に県域を越えない)の教員が自発的に仲間を募って結成したものを「教育研究サークル(またはサークル)」に分けて使用する。

## 1. 1950年代の「官製半官製」の教育研究状況—川口教師の会発足の背景—

### (1) 埼玉県教職員組合による教育研究活動

#### ①埼玉県教職員組合（埼教組）の結成

埼玉県では、1946年2月に埼玉県国民学校教職員組合、埼玉県公立青年学校教員組合協議会、6月に埼玉県中等学校教員組合が結成されている。同年9月には、この三教組の連絡協議体として埼玉県教員組合連合会が発足し、1947年6月に日教組が結成されたすぐ後に、三教組は埼玉県教職員組合（以下、「埼教組」と記す。）として一体化した。

埼玉県教育会との関係では、三教組結成以降、1947年9月頃まで「教育研究と文化活動は教育会（教育研究団体・参照）で、経済的要求活動は組合でという二本建の共存協力態勢が続いた」とされている<sup>9)</sup>。しかし、1947年7月に日教組中央委員会が教育会解散の方針を決定し、9月の日本教育会と日教組の共同声明が発表されると、埼教組と埼玉県教育会の合同会議で「会員個々の自由意志」に基づいて教育会解散を決定する方針を打ち出した。11月5日に投票を実施し、解散8964票、存続1960票で解散を決定した（11月25日に解散式を開催。）<sup>10)</sup>。以後、埼教組が「教育研究と文化活動」をも担いつつ、「経済的要求活動」に関しても県当局との対決姿勢を鮮明にしていく。

1948年には、埼教組が日宿直の拒否を県当局に突きつけ、また埼教組の強硬姿勢に対して軍政部が教組の運営に介入し、日教組もその介入の不当性を訴えた「埼教組事件」が起きている。翌1949年7月、組合規制を強化していた県教委に対して、埼教組は細谷教育長の不信任を決議した。これに対して、埼玉民事部シルバスター司令官が細谷教育長を擁護し、県教委も決議に対する反駁声明を発表した。8月にはビーヤ教育官が「埼教組の実情について」を発表し、教組幹部の専断を非難し、指導資格なしとする批判をした。このビーヤ声明に恐れをなした一部の部会が埼教組脱退を表明するなど、組合側も軟化、不信任を撤回し、以後、埼教組と県当局は「協調路線」に転換した<sup>11)</sup>。

#### ②埼教組による教育研究活動

日教組による教育研究活動として注目できるのは、1951年11月10日から12日において栃木県日光町で開催された第1回教育研究大会である。下からの自主的な教育研究の成果の積み上げという日教組の基本方針に基づき、各都道府県の教育研究大会を通じて12名ずつが選出され、参集した全国大会であった<sup>12)</sup>。

埼教組では、まず1951年7月15日、教育文化活動代表者会議を開催、日教組の「平和と独立の民主教育の確立」を掲げて、全国教育研究大会参加のための研究組織・活動等の方針を協議した。この会議には、県当局、教育研究所、各教科教育研究会・各地域教育研究会の会長等が参加し、大会における指導と協力を約束した。各地域部会、各郡市支部大会を経て、11月3～4日埼玉大学、埼玉会館を会場に、第1次教育研究県大会が開催され、日教組全国大会に準じて設定された11のテーマ別の分科会にて研究発表・討議がおこなわれた<sup>13)</sup>。県大会が県教委との共同で開催され、県の指導課、教育研究所、埼玉大学等の指導陣と各教科教育研究会・各地域教育研究会の全面的協力のもとで展開していることから、この時期、埼教組と県当局との「協調路線」のもとで、教育研究活動が展開されていたことが確認できる。

## (2) 解散後の「埼玉県教育会」—埼玉県当局による各教育研究団体の再編—

1947年11月、会員による票決により、埼玉県教育会は解散した。『埼玉県教育史』は「解散後は県単位の総合団体はなくなり、県内各地に自主的な新教育研究会（後述）が誕生した。教科別研究会、校長協会、地域別研究会等である。」<sup>14)</sup>として、埼玉県教育会の解散を契機に、県の団体による教育研究から各地の自主的な取り組みへと移行したかのような記述がなされている。たしかに、この時期、埼玉県内には、表1に見られるように、『埼玉県教育史』が指摘する多数の教育研究団体が存在している。

しかし、これらの教育研究団体は、県教育会解散後に新たに「誕生」した「自主的」な性格の団体かといえば、必ずしもそうとは言い切れない。川口プランを生んだ川口市新教育研究会（のちに川口市教育研究会）に代表される新教育運動を推進した団体は、確かに自主的な性格を持つものと言えるだろう<sup>15)</sup>。ただし、地区別研究団体に関しては、同じ『埼玉県教育史』が、「県教育会の解散により、中央組織は解体した。しかし郡市・班別の地方研究組織は実質的に存続し、やがて二三年から二五年にかけて新名称をもって各地域別、各教科別の研究団体として新たに結成された。」「各小中学校教科主任を母胎とする班別組織の活動が継続されていた」<sup>16)</sup>ことを明らかにしており、こちらの方が実態に近いと言えるだろう。県教育会がなくなったからといって、ただちに教育研究の主体となる地域の学校・教員の関係性まで消滅するとは限らないからである。

また、『埼玉県教育史』は、「自主的な」教育研究団体が1949年に「県教委の呼びかけもあって」埼玉県教育研究団体代表者連絡協議会（以下、「連絡協議会」と記す。）を結成し、「県連合体への第一歩とした」としている<sup>17)</sup>。しかしながら、この指摘についても疑問が残る。県教育会解散に多数の支持を与え、それに代わる「自主的」な教育研究団体を立ち上げた教員らが、自ら容易に県当局主導の連合体結成に賛同するとは考えにくいからである。むしろ、県教育会解散によって、制御可能な教育情報回路を失うことになった県当局が、解散後に存在していた教育研究の仕組みや学校・教員の関係を活用して、再び県内の教育情報回路を再建しようとした、と考えた方が自然であろう。そのような明確な意思があったからこそ、県教育会解散後、約1年後に連絡協議会が結成され、県による一元的な教育研究体制の構築を着実に進めることができたのではないか。

県当局が、埼玉県教育会解散後の県内の教育研究体制について如何なる認識を示していたのか。ここでは、県当局の手による『埼玉県教育要覧』を手がかりに検討する。

県当局は、教科別研究団体、職種別研究団体、地域別研究団体が「相互の連絡もなく、統合機関もないことから、その実際運営上には、不都合なことや障碍や、困難が起り、その連絡調整にせまられ」ているとの認識に基づき、1949年に連絡協議会を発足させるに至った。これにより、「特に、教科研究団体と地域別の郡市研究会との緊密な連絡をとることができ、着々一体的運営の出きるような方向に進んでいる。」と自賛している<sup>18)</sup>。

1953年の『埼玉県教育要覧』では、郡市教育研究会の下部組織として「班研究会」の機能に注目し、それへの「指導と統制」を果たしている郡市教育研究会の重要な位置づけに言及している。連絡協議会により、各教育研究団体「相互の関係が極めて円滑に運営されるようになっていく」こと、また各教育研究団体の活動について「その正しいあり方」を協議し、「年間事業計画について批判検討を加え、教職員の出張が学校教育に支障を来さないよう」にしている、と述べている。連絡調整の役割から踏み出して、研究会の目的や内容を規定しようとする意図が現れている<sup>19)</sup>。

1957年には、「ほとんど会費と寄付で運営され、県市町村の補助金によらない建前であった」<sup>20)</sup>とされる年額55万円にのぼる予算に関しても、県がその適切性を評価するに至っている。

表1 埼玉県教育研究団体一覧表

種類	団体名	連絡校	代表者
教科研究団体	埼玉県国語教育研究会	粕壁小	高橋正吉
	埼玉県社会科研究会連合会	川口西中	村本精一
	埼玉県数学教育研究会	松山高	柳直一郎
	埼玉県科学教育振興会	浦和高	松原勝
	埼玉県音楽教育連盟	埼玉大教育	池田浩
	埼玉県美術教育連盟	埼玉大教育	竹野谷仁重
	埼玉県学校体育協会	浦和高	五十里秋三
	埼玉県家庭科教育研究会	埼玉大附小	新井包子
	埼玉県職業教育研究会	埼玉大教育	平田政雄
	埼玉県書道教育連盟	浦和西高	木村栄一
	埼玉県放送教育研究会	川口幸町小	栗原勇蔵
	埼玉県高等学校国語教育研究会	松山女高	浅野光良
	埼玉県高等学校社会科研究会	不動岡高	石田義男
	埼玉県高等学校図工科研究会	春日部女高	福宿光雄
	埼玉県高等学校家庭科教育研究会	浦和第一女高	斎藤貞子
校長会等	埼玉県小学校長協会連合会	与野第一小	倉沢奎一
	埼玉県中学校長協会連合会	大成中	田中吉造
	埼玉県高等学校長協会	浦和高	五十里秋三
	埼玉県高等学校定時制主事会	不動岡高	加藤覚隆
	埼玉県高等学校教務主任会	浦和西高	伊藤好太郎
	埼玉県保育連合会	浦和幼	長沼依山
	武蔵野郷土会	川越下松江	大護八郎
	埼玉県養護教員研修会	保健課	内田喜代
郡市教育研究会	川口市教育研究会	川口市教委	手塚栄三郎
	浦和市教育研究会	高砂小	新井義典
	大宮市教育研究会	大宮女高	佐藤龍蔵
	北足立郡教育研究会	草加中	藤波武義
	川越市教育研究会	川越一中	江原四郎
	入間郡教育研究会	飯能一小	飯島彦佐久
	比企郡連合教育研究会	松山一小	平井金平
	秩父郡市教育協会連合会	秩父一小	根岸萬作
	児玉郡教育研究協議会	本庄小	宮下達也
	熊谷市教育研究協議会	熊谷西小	小久保為治
	大里教育研究協議会	深谷中	黒田義平
	行田市教育研究会	行田南小	加相誠一
	北埼玉郡教育研究会	羽生小	小宮軍治
	南埼玉郡連合教育研究会	粕壁小	高橋正吉
北葛飾郡教育研究会	杉戸中	富田英武	

【備考】埼玉県教育局編『埼玉県教育要覧 1950年』1950年、埼玉県教育委員会、pp.164-165。

また、連絡協議会の目的は、「県下の教育研究活動にその主体性を損わない程度に必要な秩序を保たせる」ことにあると明言している。にもかかわらず、研究指定校制のことだと思われる「研究事業の施設」に関して、「昭和二十四五年ごろまでの拒否的な空気に比べて隔世の観がある。しかし一般にはその実施がまだ機械のお役目で、教師の指導力の皮相な評価に終り当事者も『問題のない授業』をすることに懸命で、真に問題解決のための探究になつていない」点、「一校一主題による共同研究」等の校内研修に関して「学校による落差がひじょうに大きい」点を指摘している。県当局が、連絡協議会を通じて各校の教育研究に対する介入の度を強めている。加えて、「機械的なお役目」として研修を受け止める学校・教員側の実態があるとの、踏み込んだ認識を示すに至っている<sup>21)</sup>。

連絡協議会の議長には、埼玉県小学校長会会長で、浦和市教育研究会会長でもある高橋正吉(浦和市高砂小)が、副議長には川口市教育研究会会長の高井鉦三(川口市本町小)と竹野谷仁重(埼玉大教育)が務めている。監事としては熊谷市教育研究会会長と南埼玉地区教育研究会会長が就いており、各地区研究会の代表が体制を固めた。

1958年の『埼玉県教育要覧』では、連絡協議会の「機構」を「もっと強固なものに」し、県下教育研究団体の「再編成」「脱皮」を試みている。これは、同年の学習指導要領の改訂でその性格が「試案」から法的な拘束力を備えるものへと変化したこと、「道徳の時間」が新たに設置されたことなど、「教育内容の転換期」への対応を期待したものであった<sup>22)</sup>。

教師たちの「自主的」な教育研究の場であった各教科研究会と、県教育会解散後も実質的には残存した郡市・班教育研究会は、当初、教育委員会による教育行政上の必要から求められる研修とは「異なる」研究会として一定程度尊重されていた。しかし、県当局は、連絡協議会を設置して、次第に両者の一元的制御を強化するとともに、教育研究の「成果」を、県-郡市-班という指揮命令系統を活用して普及させようとした。連絡協議会の役員にも、県校長会会長や地域教育研究団体の代表を選任している。県当局は、埼玉県教育会が解散まで有していた情報回路としての機能を持つ組織を、行政機構に組み込もうとしたのである。これが1950年代の県下の教育研究団体と県当局の姿であった。

## 2. 教育研究サークルの分析視角

### (1) 第二次大戦後におけるサークルの「噴出」

以上のような、1950年代の「官製半官製」の教育研究状況に照らして、教育研究サークルに如何なる特徴を見いだすことができるのか。ここでは川口教師の会の検討に入る前に、1950年代のサークルという集団の組織的・機能的な特徴について押さえておきたい。

サークルは「第二次世界大戦後に戦後的な現象として噴出した」と言われる<sup>23)</sup>。1950年代には、全国各地に学生サークル、主婦サークル、工場や炭鉱等の職場サークル、都市労働者のサークル、農民サークル、民族サークル、療養所サークル等、環境や立場を同じくする者同士のサークル、また、中央政府・地方行政当局の計画に沿って行われるサークル、宗教団体指導下のサークル、労働運動の計画に沿って行われるサークルなど、母体となる団体の下部組織たるサークルもある<sup>24)</sup>。当然、その活動内容も多様であり、文学や芸術、生活記録や話し合い、趣味やスポーツ、政治活動、宗教活動、労働運動などがあつた<sup>25)</sup>。

しかし、これも機関誌や記録が残存して、存在が確認できるサークルに過ぎない。「いつ生まれ、

いつ消えたのか、はっきりしないものが多い。だれかが記録することがなければ、いつか歴史の暗がりに消え、確かな痕跡を残すことはない<sup>26)</sup>とか、「サークルの数はかぞえきれない。」<sup>27)</sup>と、存在そのものの把握の困難が認識されている<sup>28)</sup>。さらに確認されたサークルについても「どの研究もサークル運動全体の鳥瞰図を描こうとして、サークル運動には網羅的な整理をこぼむ多様性があることを発見し、見取り図に納まりきらない魅力を指摘しているかのようだ<sup>29)</sup>と言われるように、サークルの学術的な定義も容易でない。サークルの実態解明そのものが課題となる研究状況であるが、まずは本稿が対象とする教育研究サークルが1950年代に広く展開した集団形態の一つとして存在した点を確認しておきたい。

## (2) サークルの「自発的性格」

それでは、サークル独自の特徴とは何か。戦後、実際にサークル活動に従事してきた増岡敏和は、一般化することの困難さを承知で、「共通したもの」の第一に「大衆的な自主的・自発的・民主的な文化運動」を挙げ、次のように述べている。

わたしたちがサークル運動に参加するのは、だれからの命令や規則によるものではない。なにかやらずにはおれない内部の動的な感情や意思にしたがって活動するのである。サークル運動は、個々のそういう自発的意思が集ったひとつひとつによっておこなわれる運動である。この自発性の結集ということが、サークル結成に最大の力となるものであり、自発性の持続がサークル活動の発展を約束するいちばんのものである。そしてこの自発性がつよいほど集団の創意性は無限に生まれることになる<sup>30)</sup>。

増岡は、参加者の「自発的意思」は決して「一様ではない」から、「ひとつの意思によって強制され」たり、「それぞれの自由な考えは侵されてはならない」が、「平行線」とならぬように、「自分の考えをはっきりとだし、相手の意見を問い、よりよい考え方をおたがいのあいだに創造してゆくように」「自主的・民主的に」運営することが大切であるとしている<sup>31)</sup>。

鶴見俊輔も、サークルとは「顔見知りの仲間が自発的にする文化活動」<sup>32)</sup>と一応定義し、「サークルのサークルらしさ」として、「自発的性格」に固有の特徴を求めている。また「日常生活の小さな物をいかして自在な生き方を演じようとする市井人の志」がうかがえるとも述べている<sup>33)</sup>。サークル参加者が日常で出会う問題、経験、感触を出発点に、一人ひとりの生き方を大切に集まり、と言い換えてもよいだろう。したがって、鶴見によれば、「別の既成の大きな団体の指令によってつくられたもの」「より大きな集団の一部として統制されているもの」<sup>34)</sup>には、サークル固有の性格は認められないことになる。

この時代のサークルには、既存の価値とともに、価値を支える仕組みに対する不信という、1950年代の特徴が現れている。戦前の体制を支えていた人々が再び頭をもたげつつある状況の中で、それに抵抗する組織や団体が結成され、運動が活発化する。明確な理念に基づいて結成された組織、統一的で強力な指揮命令系統に基づいて展開する運動に対しても、不信感、距離感を持つ若者が現れる。日常生活における実感と身近で同じ境遇にいる人たちとの平等性に信頼を置きながら、そうした不信感と若者特有の不満や不安を放出し、受け止める、そういう意味での「自発的性格」サークルが簇生したのである。

### (3) 教育研究サークルと教師の「自律性」

教育研究サークルに関して「自発的性格」は如何に認めうるか。戦後に大きく変化した学校教育では、教育課程の編成における教師の裁量も認められ、自律的な教育研究活動が促される。一方、1950年代に入ると政府の教育統制も強化され、それに対する教育界の反発も強まっていく。現象的には、先に見た教育会の解散、日教組の結成と1951年の教研集会の開始、地方行政当局の研究組織の再編、民間教育研究団体の結成といったことになる。そうした中で、全国に教育研究サークルが生まれる。そもそもサークルは、1931年プロレタリア文学運動の指導者の一人であった蔵原惟人が、この運動の組織的基礎を工場・農村の文学サークルに求めたことに始まる。日本プロレタリア文化連盟（コップ）は260のサークル、4500人の人員を組織したが、政府の弾圧によって1934年に解体され、運動を停止した<sup>35)</sup>。戦後の1946年に日本共産党の文化サークル政策によって、サークル運動が活発化したのは、こうした戦前の遺産を引き継いでいるものといってよい。つまり、社会運動の組織化を目的とした、より大きな組織・集団の理念実現の手足として、サークルへの期待は高まっていた。実際に、日教組による教研集会の策定過程では、全国的な研究討論発表会の他、都道府県教組と表裏一体の関係においた、地方の教育研究サークルの活性化も提案されていたことがわかっている<sup>36)</sup>。

その意味で、「自発的性格」の問題は、教育研究サークルの分析において重要な視点となる。というのは、教員の専門性を支える自律的判断（自律性）に関わる問題だからである。より大きな組織や団体、あるいは行政当局に促されて、それらの理念の実現を図るという場合、教師の自律的判断の場は制限される。教員の自律的判断を伴わない専門性の向上は、技術的・事務的な側面に限定され、組織によって容易に道具化される。教育現場において突きつけられる課題は、まずは子ども・保護者・地域・職場の現実から、教師自身によって構成されるものである。とすれば、状況認識とともに何を問題として抽出するかという判断と、どのような方法で工夫改善を図っていくかという判断それ自体がすでに教師の専門性に深く関わっている。

また、これらの教育研究サークルの参加者は、基本的に公務員である点で、他の一般的なサークルとは異なり、私生活と公務との重なる部分が多い。教師が日常の職務で躰いた問題をサークルで話題にした結果、解決策を発見し、職務に反映されるということもある。参加者の私的な満足が、職務の達成や教員の専門性向上、ひいては公教育の充実や子どもの権利保障につながっており、公的な利益となるのである。したがって、行政主導の研究団体や日教組、民間教育団体等の「大きな集団」との関係をめぐるサークルのあり方は、教師の教育研究や研修に関わって特別な位置を占める問題といってよい。

### (4) 教育研究サークルから生まれるもの

「大きな集団」と比較すれば、サークルの理念は不明確で不統一、不安定であり、したがって活動内容も不安定である。もとより、組織は不安定で継続性も低く、脆弱である。そのようなサークルから、はたして何が生み出されるのか。

サークルの活動が多様であることは先に述べたが、活動の基本は、話し合いと、機関誌を通じての書くこと・読むことにある、といってよいだろう。「記録」の時代とも呼ばれる1950年代において、特に「書くこと（綴ること）」にサークル活動の本質を求める研究は数多い<sup>37)</sup>。1951年の無着成恭『山びこ学校』の出版に刺激されて出発した生活記録運動は、「大人の生活綴方」とも言われ、全国に展開した<sup>38)</sup>。また、同年、人々の生活経験の記録を掲載した雑誌『人生手帖』が刊行され、

同誌の読者サークル・緑の会は全国に800余りの支部を持ち、各地で話し合いや機関誌の刊行などの活動を拡大していった<sup>39)</sup>。

話すこと、書くことは、自己を他者に向けて表出することである。他者との緊張の中で自己と向き合い、自己を肯定したり、変革を迫られたりしながら、新たな自己を形成していく。生活現実に対する批判を通じて社会変革の運動へと向かう可能性はあるが、基本的には自己に向かうところにサークルの特質が見いだされるといってよいだろう。1950年代前半であるから、テレビはなく、一般家庭には電話もなかった。情報はラジオか活字メディアで、人と顔を合わせて話すこと、書いたものでやりとりすることが大きな位置を占めていた時代である。特に共同体や家族から離れて暮らす若者にとって、情報への渴望を満たし、自らの思いを受け止め、承認されることを期待できる場として、サークルは存在していた。

天野正子は、サークル独自の参加者間の相互作用として、次のような特徴を挙げている。

①「声を出す、しゃべる、笑う、まなざす、振舞う、演じる、身ぶりをするなど、あまり意識することなしに他者との間に了解事項を創りだすための営み」があり、参加者の「身体性の解放と深く関わる」こと（「身体性の解放」）。

②「雑談と対話のなかで生まれる思考の発展のダイナミクス」があり、そこでは『『自我』を、自分のなかに入ってきた他者との交渉の場、多くの仲間が生き生きと交流する共同主観化の場としてとらえる視点が生まれる」こと（「思想の共有性」と「思想の可変性」）。

③「日常性や生活者性を切り捨てることなく、その内部から活動の論理とそれにふさわしい表現を模索していくという意味で、そこには暮らしの思想の形成基盤がある」こと（「日常性の論理形成」<sup>40)</sup>）。

天野の指摘するサークルの特徴は、教育研究の持つ性格と適合的である。すなわち、教員の職務は、子どもたちとの生身のやりとりを通じて行われる。常に複雑性の高い条件のもとで、教師自身の判断が求められ、試されるものである。行き詰まれば、自己との対話を通じて教師自身が自らを変えていかなければならない。そのためには、身体性を伴う実践経験の交流が最も効果的であろう。教育研究サークルには、民間教育研究団体の運動や日教組の教研集会とは異なる独自の教育研究のあり方が期待されていたのである。

### 3. 川口教師の会の発足

#### (1) 川口教師の会の目的と発足の経緯

1954年7月下旬、川口市青木町の川合章(埼玉大学)の自宅に、新井、森本、野口、佐藤、篠崎、吉田、蛭田、斎藤ら8名の教員が集まった。埼玉大学1期生の新井忠雄(川口市立飯仲小学校)の「音頭とり」によるものだった。この年の春から川口市教組の青年部長となり、サークル結成に意欲的であった、新井の呼びかけに応じた人たちと、彼の大学の後輩たちとの、サークルづくりを目指した集会であった。この日は、その発足に向けた準備会としての話し合いが行われたのである<sup>41)</sup>。

そこで新井は「民主教育の確立と民間教育運動の推進」を提案する。同年4月から新井の同僚となっていた斎藤晴雄(川口市立飯仲小学校)によれば、彼の提案は「『多くの職場は、半封建的な空気につつまれ、教育目標と実践とがはなはだしく遊離して、教育活動も旧に戻った感が濃厚になっている。かく如き教育情勢の中での民主教育の確立は、科学的・組織的反省の上に立って

運動を推進せねばならない。』とし、『戦後の新教育運動の官製的・半官製的性格を見きわめて正しくこれに対処しなかったこと』の反省の上に立って『職場と直結した同志的研究が、組織的運動としてどの程度推進されたか。』『これ等の小さな動きを地域的、全県的に結合し、官製的、半官製的な引きまわしや圧力に対し、地域、職場の根強い抵抗と前進を組織することが必要である。』と。「民間教育運動の推進、という立場から問題を提起した」ものであった<sup>42)</sup>。

「戦後の新教育運動の官製的・半官製的性格」との指摘は、先に検討した県内の各種教育研究団体の実態や、研究指定校制に対する県当局の認識など、教育研究の状況が変質していく状況と重なる。「半封建的な空気につつまれ」てきている「職場」「地域」から教育研究運動を推進していかなければならないとする課題意識は、そのような県内の状況を反映したものであった。

「自分たちのサークル活動を民間教育運動の中に位置づけ、一応の運動理論みたいなもの」を自覚しながら、サークルの立ち上げに臨む。「理屈屋」<sup>43)</sup>といわれた新井の提案に対して「異論は出なかった」のは、そこに集まった教員の多くが、すでに民間教育団体の活動の経験を持つものだったことによるだろう。

しかし、事実は「『高々とかがげられた旗指物』のもとに□集した」わけではなかった。川口教師の会の「著しい特色」は「中央民間教育運動そのままの反映ではなく、むしろ、そのセクト性を批判して『地域サークル』の姿で一貫しようとしていた点」、つまり、民間教育団体の下部組織たるサークルとはならないとの自覚である<sup>44)</sup>。そのことは、「子どもと教育の危機を打開していくには、官製半官製のあらゆる既成の運動によっては不可能である。しかるに埼玉、川口において、教職員組合も含めて、すでに所与のものとして出来上がっている組織は、真に構成員それぞれが主人公になっていく性格は備えていない。我々こそが、それを作ってやっていくんだ」<sup>45)</sup>との斎藤の証言にも示されている。準備会での話し合いの結果は、以下の「共通の理解」として明示された<sup>46)</sup>。

- 1 地域サークルとして、川口の現実立って多くの人々と手をつないでいこう。中央民間教育団体の単なる下請けではない。作文教師も歴史教師も体育教師も一しょにやっていけるようにしよう。
- 2 そのために教科セクト主義を排していこう。
- 3 教組活動とは表裏一体のものだ。形式的にはハッキリ別のものだが、今後の教組活動を正しく発展させるためには、研究サークル活動を積極的に行っていかなければだめだ。川教組を内面から支える力になろう。
- 4 会員をふやす方法としては、派手にチラシを撒いたりするのではなく、話しあいによって、ひとりでも多くの先生に仲間になってもらおう。

川口教師の会の会員のほとんどが所属していた民間教育団体や、当時、「[教職員の引用者] 全員が組合員」<sup>47)</sup>であった教組の目指す方向性に賛同するのは当然ともいえる。しかしながら、「中央民間教育団体の単なる下請けではなく、「教科セクト主義を排」すという点からもわかるように、むしろそれらの団体とは異なる方向性で、「川口の現実」に立脚した、独自の課題に立ち向かおうとする姿勢が鮮明である。教組との関わりも意識され、教組の活動を「正しく発展させるため」の「内面」的なつながりを求める姿勢が示されている。後述するように、この時期、川口では各校の校長は教組から距離を取り始めており、川口市教組の委員長も校長会の推薦によって選任される状況にあった<sup>48)</sup>。また、「全員が組合員」であるから、教研集会をはじめとする教組の研究体制には、職場を通じて自動的に組み込まれている。教組であっても「真に構成員それぞれが主人公になっ

ていく性格は備えていない。我々こそが、それを作ってやっていく」という言葉の意味はそこにあった。

## (2) 土岐兼房と斎藤晴雄

ここで、川口教師の会発足の背景として、新井とともに同会の活動において中心的な役割を果たすことになる斎藤の動機に注目したい。特に重要なのは、1954年、土岐兼房との出会いである。秩父から川口に赴任したばかりの23才の青年にとって、その後の歩みを方向づける重要な出来事となった。

土岐兼房は、1907年青森県に生まれ、県内で生活綴方教師として活躍するが、生活綴方事件で身の危険を感じて退職し、家族とともに台湾にわたり教職に就く。1941年、台湾にて治安維持法違反の容疑で逮捕され、独房生活を送る。1946年青森県内の小学校に復帰、三戸教育労働組合闘争委員長となるが、2.1ゼネストで「脱落し」「『弱き者よ、汝の名は教師なり』という台詞を残して、闘争委員長を辞任」する。1950年に埼玉県比企郡松山町立松山第一小学校に助教諭として採用され、1952年に川口市立仲町小学校に異動となる<sup>49)</sup>。

1954年、土岐は川口市教職員組合の委員長となる。その経緯は次のようであった。「その頃は状況が変化してきて、それまでの教職員組合というのは、全員が組合員で、幹部は校長で、教組の役員をやると出世するというそういう組織だった。だけど、そろそろ組合の幹部を校長がやるというのでは、具合が悪いというので、校長さんたちは組合の役員からの撤退をはじめたんです。じゃあ誰に、委員長をやってもらおうかというんで、校長会が推薦したのが、この平教員だった土岐兼房という人。あの人ならば、青森の方でもやってきたと聞き、いいんじゃないかというんで、校長会推薦の委員長だったんですね<sup>50)</sup>。その川口市教組の総会が斎藤と土岐の出会いの場となった。

その頃の組合は全員が組合員ですから、広い体育館で約1000人くらいいました。前半は教育研究会の総会なんです。で途中から、閉会宣言があると、教職員組合の総会に切り替えますっていうんで、壇上の役員が入れかわって、大会になる。校長さんたちは壇から降りて、周りのパイプ椅子に座ると、それで土岐先生という人が立って、委員長の挨拶をした。訥々としながら、その時の挨拶は今でも鮮烈に憶えているし、『生活綴方と共に』という本の中に、その時に読み上げた作文が書いてありますけれど、「学校ごっこ」という作文で、「そんなに言うことをきかないんだったら、校長室に連れて行くよ。」といました、という部分があるんですよ。このように子どもの世界にも、校長室につれて行って、叱ってもらう、という権威主義がうつっている。そういうことのない学校をつくらう、という挨拶をした。土岐先生は鞆を持ってなくて、いつでも風呂敷を、風呂敷包みからそれ〔綴方〕を出してね。それでその綴方〔「学校ごっこ」〕を読んで、子どもの世界にある権威主義、これが教員の中にある権威主義の反映だと、我々は権威主義に寄りかかってはならない、権威主義を否定して、本当の民主主義を作っていこうとするのが、教職員組合だ、というような話を訥々とされた。僕はそれを聞いて、非常に共感して、どういふ人が全然知らないけれども、こういう人についていけば間違いないというふうに直感しましたね。<sup>51)</sup>

「教員の中にある権威主義」を否定していかなければ、子どもの前で民主主義を語ることはできない。子どもの綴方を手がかりに教員のあり方を問う土岐の思考様式に、「間違いない」と斎藤は「直感」したのである。土岐はこの時47才、生活綴方教育で体制側とも対峙し、教員社会の弱さとも

向き合ってきた。そのような人物との出会いが、教組と校長会、県当局が迎合している教育界の状況に寄りかからず、子どもを出発点とする教育研究へと駆り立てていったのだといえよう。

### (3) 川口プランとの関係

一方、「川口の現実」に立脚する学校教育の取り組みに関しては、1940年代後半に川口市の取り組みとして広く展開した川口プランとの関係を避けて通ることはできない。川口教師の会にとって、川口プランは如何なるものであったか。

川口教師の会を立ち上げた新井、斎藤の勤務校である飯仲小学校は、その2年前の1952年に開校したばかりであった。初代校長は前原忠吉である。飯仲小学校校長兼川口教育委員会の指導主事であり、「川口プランをつくった中心人物の一人」<sup>52)</sup>であった。川口教師の会は、「川口プラン最後の砦」から生まれたことになる。当時の飯仲小学校の情景を斎藤晴雄の証言からみしてみる。

昭和27 [1952] 年あたりになると、川口プランそのものがほとんど影を潜めてくるんです。時はもう天下の川口プランでね。[中略] 飯仲小学校が開校した頃は、大真面目に川口プランをやっている学校はなかった。なかったけれども、この前原忠吉という人は、指導主事兼校長で、若くして校長になってますから大張りきりで、川口プラン最後の砦、自分が校長になっているわけですから、そこで生活教育とはかくあるべきであるというのを、学校として示したいと、すごい意気込みで学校づくりをやったんです。その勢いが余りすぎて、毎日、すべての教室の授業を見て歩くんです。ノートを抱えて、見て歩いて、例えば、1時間に3つぐらい見て歩くでしょ、休み時間になるでしょ、そうすると校長室に引き上げる。その授業を見てもらった3人は校長室にすぐに行かなければならない。そこですぐ指導があるんですよ。それがなんていうか。生活教育の理論に基づく指導ですから。忘れることのできない、彼の指導法はね、教室に入っていた時に、今、算数をやっているとか、これやっているとか、社会科やっているとか、わかるような授業をしていたんでは駄目だ、そういう理論なんですよ。子どもの生活の系統こそが教育の系統であると。その子どもの生活を組織することが授業であると、こう言ってみれば、少し前の生活科の議論をとっくに乗り越えた、そういう理論ですよ。<sup>53)</sup>

川口プランの一時の隆盛は既に見られない時期であったが、川口プランの実践側の中心人物の一人であって、校長としてのみならず川口市の教育実践に影響力のある立場にあった前原が、川口プランと近い生活教育の考え方で飯仲小の学校経営を行っていたことがわかる。その成果は『生活する子どもの学校』（明治図書、1955年）の刊行にも示された。しかし、校長の思想の具体化を目的として学校経営を行い、教員の授業を監視し直接指導するような、教師の主体性を抑制するやり方に違和感を持つ教員もいたのである。加えて、前原個人の職員に対する不信感を抱かせる行為もあり<sup>54)</sup>、前原と教員らとの間の「溝は決定的にな」ったという（前原は1957年に飯仲小から異動した）。

さらに、「実践、理論上の対立点」もあった。斎藤は「生活の系統が授業の系統だなんて、煙に巻くようなことを言ったってわかんねえぞと。系統的な基礎学力を付ける教育の必要がある。片方で、基礎学力って言い出しただけで、校長はカッとくるんだから、基礎学力＝教条主義の学校という理論を持っているわけですから。」<sup>55)</sup>とも述べている。「系統的な基礎学力を付ける教育」が必要との立場から、前原（川口プラン・生活教育）との距離感が大きくなっていく校内の状況がうかがえる。

ただし、「あの頃、問題解決学習か系統学習かっていう論争があったりしましたけど、あれほど上品じゃな」かったという。「教頭は基礎学力擁護で系統学習。[中略]それが校長派か反校長派かみたいにゴタゴタにしているんですが、そこにはそういう当時の教育理論の反映があって、僕はそういう中で問題解決学習か系統学習かという対立が真の対立ではないという、というようなことを、生意気にも提起して、それで本当の教育とは何かということを手探りしてやっていこう。」<sup>56)</sup>ということになった。こうして、飯仲小学校を起点にサークルが作られたのである。

#### (4)「若い人」の抛り所として

飯仲小学校には「それに共鳴する人が職員室の中にいっぱいいて、1人が図工美術のサークルを背負って立つ、1人が算数のサークルを背負って立つというふうな職員室の中に各サークルの代表者みたいなものがいっぱいいるというような、そういう学校になって」いった。校長の思想を具体化する手段として教員を位置づけたことが、むしろ川口教師の会の発足につながるような、教員の主体性を喚起したという面もあったのではないか<sup>57)</sup>。「共通の理解」に「多くの人々と手をつないでいこう」「一しょにやっていけるようにしよう」とあるのも、校長主導の、特定の考え方に依拠した縦型の学校づくりを否定して、教員間の横のつながりや話し合いを大切にするという意思の現れであった。斎藤晴雄は晩年、次のように語っている。

それほど立派な動機、高度な要求というよりも孤立感を埋めたいっていうか、その方が強かったというのが実感ですね。サークルに参加してくるような人は、若い人に多いでしょ。若い人はどうしても職場の中で孤独感に悩む。今、新任教師の自殺問題が出てきている。教師はがんじがらめで、いわゆる人事考課と初任研体制というものが組まれています。だから、サークルに参加してくる余裕がない、そういう状況だと思います。けれども、僕らの時代は、そういうものはないから、ひとり、職場の中で悶々としているわけですね。孤立感。だから集まって自由に話し合いましょ。サークルはかなりそういう孤立感を埋めていく要求にはマッチしたんじゃないんですかね。逆に、そういう要求を教組の青年部なんか、組織的にいろんな催しをやったり、青年教研をやったりね。[中略]そういうものが組まれてくると、サークルに対する切実感みたいのはなくなってくる。あえてサークルをやらなくても…というふうになってきている。若い先生が、決まりきった研修のレールの上だけではなくて、喫茶店なんかで、気の知れた仲間と、ああだこうだといって、悩みを交流する。その中には、実践上の悩みもあるだろうし、もっと教師としてどう生きていくかというような、そういう悩みもある。あるいは人間関係、もっと言えば恋愛上の悩みとかね。そういうようなものも含めて、ファミレスや喫茶店で語りっというのは、果てしもなく続くってことは、ありますよね。そういうものが、いってみれば、サークルだったわけです。サークルの中から何組かの夫婦ができたりもしましたよ。そういうことって大事な側面なんだよね。<sup>58)</sup>

ここでは「若い人」の「孤立感（孤独感）」が強調されているが、10代、20代の教員の割合が高いことが、この時期の特徴であった。1948年12月時点で、埼玉県内の小学校教員に占める10代、20代教員の占める割合は、72.5%、同じく中学校教員で56.4%に達している<sup>59)</sup>。特に女性の小学校教員の割合は、全教員8,798名のうち4,723名(53.7%。1954年度。全国平均は46.8%)と高く、そのうち39.8%が助教諭であった(男性の助教諭率は28.4%。男女の数値はともに1954年度)<sup>60)</sup>。10代、20代に偏った小学校教員の年齢構成、特に女性の助教諭の割合の高さが、この時期の教員

社会の特徴であった。斎藤自身、資格認定講習で助教諭から教諭となっている。師範学校や新制大学の教育学部のような特定の学校の卒業生を中心とした仲間意識を持つことはなく、その意味で孤独感を持つ「若い人」は多かったのであろう。また、24才以下の女性が小学校教員に占める割合は1948年12月時点で43.6%と多く<sup>61)</sup>、壮年層の少ない職場は、20代の男性教諭にとって自らが職場を牽引するという意識が高くなったとしても不自然ではないだろう。さらに斎藤の証言に出てくる「恋愛」「人間関係」「教師[の生き方]」などの悩みを丸ごと受け止める場、「若い人」の拠り所としてのサークルも意識していたことがわかる。秩父から川口に転任してきたばかりだった斎藤にとっても切実な問題であった。

このことから、川口教師の会が、何かを実現するために発信したり、運動したりという、外向的な性格よりは、参加者同士が会うことから始まる何かと向き合い、その成果は参加者や職場に還元されるという内向性を帯びていたことがわかる。そして、教育実践や職務に関わる、いわゆる教育情報の伝達・交流のみならず、そうしたことを可能とするような若年教師の精神的な支え、拠り所となるべく発足したのである。

明確な教育理念を持つ全国的な組織との関わりは意識しつつも、それに包摂されえない、教師一人ひとりの思いに応える場として、川口教師の会は発足したのである。事務局長は斎藤晴雄、事務局は4畳半の斎藤宅となった。会の「きまり」は次のように定められた<sup>62)</sup>。「みんな」という語が多用されており、参加者全員にとって有意義な集まりになることが目指されている。

- 一、この会は『川口教師の会』といます。
- 二、川口教師の会は、毎日の教室でこまっていることなどを話しあい、みんなで手を取りあって、すこしでも本ものの教育をもとめようとするものあつまりです。
- 三、原則として、一月二回ずつ例会を行って実践の交流、研究につとめるほか、みんなの相談によって会の目的にそう行事を行います。
- 四、入会を申しでた人は、みんな会員です。
- 五、会費は年額二〇〇円で、原則として四月と十月に一〇〇円ずつ納入しますが、都合のよい時でよいのです。
- 六、事務局は（川口市栄町二の六六 斎藤方）へおきます。  
自由なあつまりですからキマリなんかなくたっていいようなものですが、新しい方々のためにもあったほうが便利だというのでつくったものです。

## 4. 川口教師の会の活動内容

### (1) 話し合い活動

#### ①職場の問題から

サークル発足の経緯からすれば、その活動内容は個々の会員が抱く具体的な問題を話し合うことが柱となる。1954年8月4日、第1回目の会合が飯仲小学校で行われた。会員13名の参加があり、森本（西中）、篠崎（青北小）の「補習教育」をテーマとした報告に基づいて、話し合いが行われた。「折柄夏休みの補習をやっている最中で話がはずみ、補習にとまなう子どものユガミなどが明きらかにされた。が、結論は『人間の商品価値を高めようとする非人間的教育だ』という以上に出なかった。親の願いの問題も出るには出たが、キメの細かい話し合いにはならずしまった。」というものであった<sup>63)</sup>。

教室で困っていることを話し合う。どんなことでも困っている。若い先生であれば、[子どもが] うるさくて話を聞いてくれないとか、それから、給食費の集金まで教師がやっていた時代ですから、家庭の貧困の問題なんかがもろにくる。それから、川口は、後に映画『キューポラの街』で描かれたような、在日朝鮮人が北朝鮮に集団帰国するというような、在日朝鮮人がたくさんいて、クラスの中にも必ずいたわけですよ。そういう子どもは、教育の目標は一体なんだ、その子どもたちにとって。明日の日本を作るとか、そういうことは目標に足り得ていないわけでしょう。まあ、そういう次元のことから、毎日勤務が大変で、くたくたに疲れちゃってとか。それから賃金も安かったからねえ。この頃はね。[中略。1954年当時、本俸が10,000円に達していなかった話など] 当時の若い教師は、とにかく食えなかった。<sup>64)</sup>

翌1955年7月からは、話し合いの記録をとり、次の会合でそれに基づいて検討がなされるようになった。上記のように、話題は出されるものの討論が深まらないこと、また、テキストを使用しても「七面倒くさく固くしてしまうのは、うまくないんじゃないかなあ、もっと気楽に話したい、その話しあいを基盤にして行かないと、テキストが宙に浮いてしまう」<sup>65)</sup> という、問題意識からであった。話し合い活動の困難に対する一つの改善策であった。

話したことを記録し、それをもとに討論を深めていく方法は、近隣の浦和市西堀青年学級（大田堯）の「ロハ台」で既に成果を取っていた<sup>66)</sup>。斎藤によれば、浦和教育を語る会において、話し合いの記録が「だいぶ成果をあげている」ので「良いことはどんどんまねして行きましょう」ということになり、同会の「話しあいの記録」第6号を川口教師の会の参加者で回覧して「へエーいいなあ。」「記録を読んだだけですぐに入って行けそうなニオイがしてくるね。」「うちでもやろう」ということに決まったという<sup>67)</sup>。この前月の6月には、後の埼玉教育研究サークル連絡協議会の結成に向けた代表者の会合が開かれていることから<sup>68)</sup>、近隣のサークル間で話し合いの深め方についても情報交換が行われていたものと思われる。斎藤は、記録に基づく話し合いについて次のように語っている。

僕はこの頃から几帳面だったから、ガリ版で、時・所・出席者まで全部書いて。この特徴は、まとめて書くのではなくて、発言したことを全部ほとんど速記録的に載せるということ。それでいこうという方針でスタートした。というのは、前回にこれを印刷して配って、次回にはこれを吟味するんです。重複しないように簡潔に、自分たちが話し合ったことを読んで、それを再検討するというのかな。そこに意味がある。この頃ね、「教育体験の再吟味」ということを、僕らはしきりに言ったんです。つまり、一回性で流れていく実践を記録して、それを吟味する。そのことによって、教師は成長する。しかも、それを集団でやることによって、より余計に深まっていくということですね。<sup>69)</sup>

川口教師の会の「話し合いの記録」は、1955年7月2日から1956年10月30日までの16号分が残されている。日時・場所・参加者・内容別に整理すれば、表2のようになる。13号のみ1956年6月～8月と日時が明確に記されていないが、後述するように、13号は、5月26日～8月にかけての話し合いの内容をまとめた文章で、この期間に7月4日ほか1回分の話し合いがなされているので、計17回分の話し合いの記録ということになる。

およそ1か月に1回ほどの間隔で、会員の勤務する学校の教室や宿直室、または会員の個人宅で開催された。参加者は判明している範囲で、多くは川口市内の小・中学校の教員で、各回9～24名で、10～15名ほどの規模で行われていることが多い。勤務校別では、市内20の小学校のう

表2 川口教師の会の「話し合いの記録」

号	日時	場所	参加者	内容
1	1955.7.2 終了18:00	舟戸小学校教室	福田(舟戸小)、土橋(舟戸小)、百鬼(本町小)、島田(本町小)、内田(本町小)、中村(本町小)、島田(与野中)、生方(十二月田小)、小泉(芝中)、新井(飯仲小)、飯塚(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、蛭田(西中)。13名	「そうじの事」
2	1955.7.23 終了19:30頃	飯仲小学校教室	海後(埼玉大)、川合(埼玉大)、新井つ(飯仲小)、新井た(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、飯塚(飯仲小)、大和(飯仲小)、島田(本町小)、百鬼(本町小)、内田(本町小)、関根(仲町小)、上村(仲町小)、石井(仲町小)、篠崎(青木北小)、佐藤(青木北小)、石川(青木北小)、小泉(芝中)、青山(芝中)、蛭田(西中)、土橋(舟戸小)、生方(十二月田小)、高橋(上青木中)、島田(与野中)、宇佐美(飯塚小)。24名	・そうじの問題 ・「父兄との結びつきについて」
3	1955.10.1	飯仲小学校教室	飯塚(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、新井(飯仲小)、新井(飯仲小)、辺見(芝小)、土橋(舟戸小)、大和(飯仲小)、宇佐美(十二月田小)、生方(十二月田小)、佐藤(青木北小)、篠崎(青木北小)。11名。	・子どもの作文
4	1955.12.13 (火)	仲町小学校宿直室	土岐(仲町小)、関根(仲町小)、石井(仲町小)、鷺谷(仲町小)、中村(仲町小)、大和(飯仲小)、新井タ(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、篠崎(青木北小)、佐藤(青木北小)、宇佐美(飯塚小)、土橋(舟戸小)、生方(十二月田小)、坂田(幸並中)、浜田(幸並中)、新井ツ(幸並中)、青山(芝中)、小泉(芝中)、高橋(上青木中)、上村(仲町小)。20名	・「教師の方向づけ」 ・「川口教師の会にのぞむこと」 ・「会の運び方について」
5	1956.1.7 16:00～	関根宅	関根(仲町小)、飯塚(飯仲小)、宇佐美(飯塚小)、浜田(幸並中)、坂田(幸並中)、新井経(幸並中)、佐藤(青木北小)、斎藤(飯仲小)、新井忠(飯仲小)、岩松(北葛栗橋小)、新井勘(十二月田小)。11名	・「校長さんとのこと」 ・「早く帰れない学校のことから一地域とのからみあい」
6	1956.2.11	仲町小学校宿直室	大和(飯仲小)、関根(仲町小)、土橋(舟戸小)、新井ツ(舟戸小)、斎藤(飯仲小)、小泉(芝中)、飯塚(芝中)、青山(芝中)、吉田(南中)。9名	・「教研の土産話と報告」 ・「光栄ある多忙を問題点とし、又職員会議が議決機関か諮問機関かということ、前に出たいいくつかの問題について」 ・「中学校の性格について」
7	1956.2.23 17:00～	吉田宅(川口市青木町)	坂田(幸並中)、新井ツ(幸並中)、浜田(幸並中)、新井カ(十二月田小)、生方(十二月田小)、青山(芝中)、小泉(芝中)、土橋(舟戸小)、篠崎(青木北小)、清水(芝小)、高橋(上青木中)、新井タ(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、大和(飯仲小)。14名	
8	1956.3.7 (木)17:30～	青山宅	飯塚(飯仲小)、新井タ(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、大和(飯仲小)、宇佐美(飯塚小)、清水(芝小)、篠崎(青木北小)、新井カ(十二月田小)、生方(十二月田小)、板倉(芝中)、青山(芝中)、小泉(芝中)、新井ツ(幸並中)。13名	・「共通な課題 共通な姿勢—ぞくぞくと起る困難な問題のために—」 ・「職場の主体性と連帯感」 ・「仲間意識育成の好機—進学・就職・家庭—」 ・「進学指導と基礎教育—小・中の連絡を密に—」
9	1956.3.29	青山宅	記録なし。[発言記録のイニシャルから10名の発言が認められる。]	・「文部省が云々 [教組は文部省が出したのだから反対だ、ということについて]」 ・「川口での教育について」 ・「問題集か教科書か(「主に数学の問題について」「小の基礎学力について)」
10	1956.4.21 (土)	青山宅	青山(芝中)、新井カ(十二月田小)、新井タ(飯仲小)、飯塚(飯仲小)、宇佐美(飯塚小)、小泉(芝中)、斎藤(飯仲小)、坂田(幸並中)、篠崎(青木北小)、竹永(神根小)、浜田(幸並中)。11名	・「新年度における学級経営方針について」
11	1956.5.26 (土)午後	神根小学校竹永学級の教室	原(神根小)、山本(神根小)、飯富(神根小)、中村(神根小)、竹永(神根小)、鈴木(神根小)、宮沢(神根小)、飯塚(飯仲小)、大和(飯仲小)、斎藤(飯仲小)、新井(飯仲小)、高橋(上青木小)、篠崎(青木北小)、宇佐美(飯塚小)。14名	・「このまえのこと」 ・「実践の報告」「読解ということ」 「文法用語のこと」「重文・複文のこと」「文法学習の位置づけ、『です』のこと、敬語のこと」 [記録にはないが、『教師』の読後感を話し合った。12号から]

12	1956.6.20 17:30～	青山宅	篠崎(青木北小)、土岐(仲町小)、新井(飯仲小)、川合(埼玉大)、清水(芝小)、新井(幸並中)、青山(芝中)、高橋(上青木小)、齋藤(飯仲小)、小泉(芝中)。10名	・『教師』(国分一太郎氏著)の読後感を気軽に話し合い、教育の現実と照らし合わせてみたら、おもしろいだろうということになり、あつかましくもみんなに割りあてました』 ・「そんなことでは間に合わない」 ・「政治・経済と教育の屈折という事」 ・「発達段階ということ」
13	1956.6～8 [7.4に関根宅で開催]	記録なし	記録なし	・「わたくしたちは、こう学んだ国分一太郎氏の『教師』(その仕事)をめぐって」 (「人間を全体としてとらえることの大切さ」「観念性からの脱出を」) [5.26、6.20、7.4、8月(日時不明)の計4回の『教師』の話し合いの内容をまとめたもの。1956年10月号『カリキュラム』誌の掲載されたものと同内容。]
14	1956.9.29 (土)	関根宅(金山町)	佐藤(青木北小)、篠崎(青木北小)、青山(芝中)、小茂鳥(商高)、高橋(上青木小)、飯塚(飯仲小)、齋藤(飯仲小)、小泉(芝中)、新井(十二月田小)、関根(仲町小)。10名	・「地理教育について」 ・「問題提起」[「中学校における教科のあり方、位置づけ」 「学力低下の問題」「教師の指導方法」「生活単元の批判」] ・「中学校の問題における問題を小中の関連に関連して話し合う」
15	1956.10.16 17:30～ 20:30	関根宅(金山町)	新井タ、齋藤、関根、青山、和田、小泉、板倉、高橋、奥山、福田、佐藤、新井カ。12名	・「芝中数学研究会の様子(二年生の数学・計算尺について)」 ・「仲間意識と学力を高めることの関係について」
16	1956.10.30	関根宅(金山町)	和田、大畑、小泉、百鬼、関根、齋藤、逸見、春日、新井カ、佐藤、福田、内田、高橋、安田、秋葉、清水、内田、新井タ、飯塚。19名	・「生活指導(仲間意識)と学力(「問題の出発点」「実践上のナヤミその他」「助け合い学習は仲間意識をたかめるのか」)」

【備考】川口教師の会「話し合いの記録」(1955～1960年)より作成。

ち10校から、同11の中学校のうち5校から教員が参加している(1958年時点での学校と照合。北葛栗橋小、与野中といった市外からの参加者もいる)。1955年7月23日には海後勝雄と川合章が、1956年6月20日には川合章が、それぞれ参加している。

話し合いの内容は、「そうじ」「父兄との結びつき」「子どもの作文」「校長さんとのこと」「多忙」「職員会議」「仲間意識(中学校)」「学級経営」「学力低下」など、参加者である教員の職務の中で生じる日常的な問題をテーマに、語り合うものが中心である。また、自らの実践をある程度、報告のようなまとまった形で発表・討議することもあった(1956年5月26日)。この他、川口教師の会のあり方や話し合いの持ち方も話題となっている。

しかし、話し合う、といっても単純なことではない。先に述べた話し合うテーマの掘り下げという困難の他に、たとえば、話す人が限定されていたり、発言をしないまま帰ったりする人もいる。話題や参加者の性格、人間関係、会の規模や雰囲気など、発言の濃淡には様々な原因がある。沈黙が続けば、現象的には話し合いは成立しない。「若い人」「みんな」のサークルとして、この問題は、活動の生命線にもなりうる問題である。記録や次に述べる文献活用も解決策の一端であったが、他者と関わる参加者のそれなりの心構えが不可欠であった。齋藤は、発言を要求するのではなく、沈黙をメッセージとして読み取り、相手を理解することの大切さを指摘している。

活発に発言する人もいるし、うなだれてじっと下を向いてほとんどものを言わないでいる人もいる。そういう人は頭の中では何を考えているか、それが大事なんだよな。だから僕はよくサークルや研究所の組合の場

とか様々な場で活発に発言する人の意見というのは、わかる。それは確かに貴重ではあるけれども、頭を垂れている人の頭の中にある何か、何があるんだろうか、そこをすくいあげなければ、そこをすくいあげるような組み立てが大事なんじゃないか。中には終始黙ってうつむいて終わって去っていく人もいるよね。その人にとっては、今やっている事は…考えているならいいんだよ、だけど、違うことでしょ。おそらく頭の中は違うことで考え込んでいる…早く終わらないかなとか、黙って考えていることって何か、それが想像できるか、汲み取れるか、というところがとっても大事ですね。これは授業でもいつも考えてきたね。はいつ、はいつ、はいつて手を挙げる子どもはいいんだよ。それができないで、もじもじしている子、下を向いている子、そういう子が何を考えているのだろうか、それがどうやったらすくい取ることができるだろうか。だから、僕は実践の手法として、綴り方を一貫して大事にしてきたのはそこだよ。70)

## ②文献の検討を通して

話題を持ち寄り、テーマを固めて話し合うことの他に、共通の文献を手がかりにした話し合いも行っている。1956年6月～8月にかけては、5月に刊行されたばかりの国分一太郎『教師—その仕事—』(岩波新書、1956年)について、「読後感を気軽に話し合い、教育の現実と照らし合わせてみたら、おもしろいだろうということになり」71)、教師のあり方について議論している(表2の12号、13号)。ここでは、文献を手がかりにした話し合いの中で、参加者が問題意識を深めていく過程を追うことにする。

国分『教師—その仕事—』は、いわゆる「逆コース」の時代状況の中で、教師の仕事は社会主義・共産主義の立場に立って「社会改造」を「いそぐ仕事」か、それとも「社会の進歩」を念頭に置きつつも、まずは地域や保護者の願いに耳を傾けて、子どもを「一人前の人間」「日本国民」「人類の仲間」へと育てる仕事かという大きな論点を提示している。その上で、後者に力点を置きながら、教師のあり方を論じたのが、この著書の一つの特徴であった72)。

『教師—その仕事—』の検討は、1956年5月～8月の計4回の話し合いの中で行われている。6月20日の会合には川合も参加している。4回にわたって話し合われた内容は、斎藤の手によって文章化され、表2の13号に示された。また、その同じ文章は同年10月、『カリキュラム』第92号に、埼玉県川口教師の会「国分一太郎氏の『教師』〈その仕事〉をめぐって わたくしたちはこう学んだ」として掲載された。表2の12号の「内容」欄からもうかがえるように、教師たちが日常の職務の中で突きつけられる「教育の現実」をどう克服していけばよいのか、国分の教師像を通じて「教育の現実」を捉え直そうとするものであった。結論から言えば、教師として「人間を全体としてとらえることの大切さ」への気づきをもたらすものとなった。

まず、話し合いでは、著者の国分が、すべての親たちが考えている、子どもへの願いと教師への期待について、以下のように考えていることを確認する73)。

第一に「親たちは、自分の子どもが、丈夫な子どもに育つてくれることを願っています…。

第二に「親たちは、自分の子どもが賢い子どもに育つことを願っています…。

第三に「親たちは、自分の子どもが、しつかりした人間に育つことを願います…。

第三に「親たちは、自分の子どもが、食いはぐれのしない人間になるように願ってします…。

①「親切な先生であつてほしい」

②「えこひいきしない先生であつてほしい」

- ③「なるべくなら、ひとりも落ご者を出さないような、先生であつてほしい」
- ④「実力のある先生であつてほしい」
- ⑤「人柄のいい先生であつてほしい」

話し合われる中で、このような国分の考えは、「まことにもつともなこと」と「共鳴」しつつも、「現実に私たちが聞く親たちの声はそのようなものばかりではない。逆のものさえある。」ことに気づく。「たとえば、そつと、手土産なんか持つてきて『〇〇中学へいれたいんだが、うちの子どもだけ何とか特別に面倒を…。』とか、『リクツはいいから言いつけられたことをよく守るように、シツケて下さい…。』とか、『まあ、ほかのことはどうでも、ソロバンだけできるようになれば、いいですよ。いまんところ、学校よりかソロバンじゆくの方へ喜んで通つてるんで、アイツもまんざらじやねえと思つてるんですがね…。』『いまの学校じや、天皇陛下のありがたいことを教えてないんですか？』『助け合い勉強とかいうのをやらせていらつしやるそうですけど、もともとできない子はある程度ほつておいても仕方ないんじゃないでしょうか。できる子が重荷になつてかわいそうですわ…。』など、「困った親の願い」が「いっぱい披露され、みんな、考えこんでしまった」という。

しかし、さらに「話しあつているうちに、一見矛盾するような形で出されてくるこれらの現象的な願いも、その底にあるものを深くさぐつてみると、ほとんどすべてが、人間らしい親の願い、つまり国分氏が挙げたようなものにつながるものを持つていてのではないか。」ということが次第に共有されるようになる。それは次のような保護者の行為をめぐる話し合いを通じてであった。

教師からの「何でもいいから、先生への注文を書いてください。」との依頼に、ある母親は「君が代が正しくうたえないことを最近知りました…来年は最上級生になりますので、正しくうたえるよう御指導下さい…。」と書いた。しかし、その母親は、その紙の別のところには、ローマ字の字体やつづり方について熱心な質問を寄せ、さらに「…画用紙に下手な絵を描き“わたりろうか、(教室だより)の表紙を作りました。発行日には必ず夕食後主人に見せ、それからわが家の話しあいが始まります…。」とも書いていた。話し合いでは、はたして「この母親は反動的な母親だろうか？」と問うたのである。「君が代…」という願いだけでなく、「現象的なコトバの底にあるものに眼を注ぐと、そこには実に人間的な、発展的なものが流れていることに気づ」き、国分の挙げた親の願いとは対立していないとの結論に至った。

教師は、「人間を、複雑な、デリケートな、有機的なものとして、それを総合的に全体としてとらえようとする」「見方」、「態度」、「力量」が必要である、「教育が人間をつくるものである以上、人間についての、直線的、一面的、公式的な見方は、政治や社会についての公式主義と同様に厳しく批判されるべき」であることが共有されていった。一見、否定的な「教育の現実」が、文献を素材にした話し合いを重ねる中で得られた、人間に対する多面的な見方によって捉え返される様子、教師自身の「反省」を促し、問題への新たな取り組みへと導いていく様子が明らかにされている。

ところで、この『カリキュラム』誌への掲載は依頼原稿であった。執筆した斎藤晴雄が寄稿前に川合に草稿を見せていることから、川合から持ち込まれた話であったと推測される。草稿を見せた際の川合の反応と、斎藤の対応が語られている。

それ [国分一太郎『教師—その仕事—』] をめぐっては、これはもう賛否両論、さまざまな点で。それで当時『カリキュラム』っていう雑誌があつて、今の生活教育、日生連のね。生活教育の前身。これにサークル

で話し合ったことを載せてくれという依頼があつて。僕は原稿を書いて、川合先生のところに持っていったら、「新井〔忠雄〕君なんかは不満なんじゃないかな。」なんて、ちらっと。あの先生はいつもそういう言い方をする人ですね。つまり、新井君っていうのはバリバリの、何て言うのかなあ、マルクス主義者っていうか、要するに社会科学的な見方の鋭い人。僕の原稿はそういうものはほとんど捨象して、人間を全体として捉えることの大切さ、みたいなことを中心に、教師の子どもや国民を見る目はもっと豊かで複眼的でなければならない、ということを確認にあの本には書いてあるわけで、そこを中心に書いたら、「新井君は不満だろうね」って一言おっしゃる。社会科学的な見方が全く欠けている、ということをおっしゃっているんだなあ、と思って、まだ締め切りまで間があったから、すぐに書き直して社会科学的な分析を加えて投稿した、ということがあったんですね。<sup>74)</sup>

サークルでの話し合いの過程で、新井から「社会科学的な見方」による発言があつたであろうこと、川合がその点を重要視し、斎藤がそれに応えて加筆したことがわかる。これは『教師—その仕事—』で論点とされた「社会改造」「社会の進歩」に対する教師の姿勢、をめぐってのサークルの姿勢に関わることであつた。斎藤の加筆した部分はおそらく論文の後半の「観念性からの脱出を」の部分だろう。「教育によつて社会が改革できるとする考え方に特徴的にあらわれている教師の観念性、一面性は“いわゆる”進歩的教師のみが占有しているものではない。教師社会の一般的な欠陥として批判し自己批判されていくべき性質のもの」である。だからといって、「社会科学の本を本棚の奥にほうりこんで、教材研究にだけかじりつ」いていけばよいのではない。教師は「ノロノロとした、あまりにもまわりくどい毎日の仕事をしながら」も、「国分さんの考え方に一貫している、〈教育における高度の政治性〉といった点を見落してはならない」。教育の持つ政治性を自覚すべきとする、「一会員のコトバ」は「正しい」と述べられている部分である<sup>75)</sup>。

以上のように、文献を題材に話し合いを重ね、保護者の子どもに対する願いという「地域の現実」と突き合わせ、教師の仕事への理解が深められていったのである<sup>76)</sup>。『カリキュラム』誌への掲載に至る話し合いの過程は、その60年後の斎藤の証言からもうかがえるように、川口教師の会における教師たちの成長の軌跡を示すものであつた。

## (2) 機関誌『たゝら』の発行

発足から3年が経過した1957年2月、川口教師の会は機関誌『たゝら』第1号を発行する。新井忠雄の筆による巻頭言「たしかなあしどりのために」は次のとおりである。

川口教師の会が生れてから、三年になります。わたくしたちは、この土地に生きている子どもと、共に悲しみ、共に喜んできました。わたくしたちが、その悲しみや喜びのなかから教育の問題をさぐり出し、深め合つて来た道は、川口市八百余の教師のあゆみであり、日本の教師の歴史でもありました。そして、今、わたくしたちは、一つの確信をもつて進もうとしているのです。それは、戦後の変動によって大きく転換した教育が、政治的・経済的抑圧によって再び旧にもどりつつあるという不安に対し、日本の教育は正しい方向に発展しているという確信です。日本の子どもの教育が、力によってではなく、父母のねがいや教師の手で支えられ発展している姿が、今日ほどはっきりあらわれたことは、日本の教育史にかつてなかったことです。このことを、わたくしたちは“正しい方向、と考へ、こうした教師の一人になることに限りない誇りと力強さを感じているのです。〔後略〕(新井)

「政治的・経済的抑圧によって再び旧にもどりつつあるという不安に対し、日本の教育は正しい方向に発展しているという確信」は、これまで述べてきたような、川口教師の会の3年間の活動の蓄積によってもたらされたものである。『たゝら』という誌名は、「川口いものに深い結びつきのある」ことから命名された。「江戸時代（文化文政の頃）から明治の初年まで、鉄をとかす炉へ風を送るのに大きな『ふいご』の名まえが『たゝら』なのです。このたゝらは中央を境板で二つに仕切った大きな四角な箱でそのふたを六～八人の若者がふみ下ろして風を送ったのだそうです。[中略]郷土川口の教育に新風を吹きこむ『たゝら』をなどと言ったら笑われそうですが、とにかく教師の会の機関誌になんとふさわしい名称であることよ」との言葉からもこれまでの活動に十分な手応えを感じとっていたことがわかる。

それに加えて、後述するように、県内の他のサークルとの交流を深める目的で、川口教師の会が中心となって、1955年埼玉教育研究サークル連絡協議会を発足させており、交流の輪も広がりつつあった。

『たゝら』第1号の目次構成は、表3のとおりである。飯仲小、芝小を中心とする13名の14点の論文集である。前出の飯仲小学校長前原忠吉も自らの実践記録を寄稿している。いずれも日常の子どもの関わりから生じる問題意識を綴ったもので、生活綴方の文集といえるものである。その意味では、上記の「話し合いの記録」と連続するものであり、話し合いを通じて深められてきた教育現実の見方を示す場でもあった。

前掲『戦後日本教育史』は、民主主義教育の進展における生活綴方運動の役割の大きさを指摘する中で、「生活綴方の指導方法を、教師自身のサークル活動にとりいれ、現実の問題に着目し、これを綴り語り、相互に検討をくわえつつ、すぐれた実践の方法をみだしてこれをひろく教師仲間にもひろげようとして運動がすすめられていった。」と、生活綴方の方法にサークル活動の特質を求めている<sup>77)</sup>。確かに、川口教師の会にも当てはまる指摘である。ただし、中央の民間教育運動の地域への展開の現れとしてではない。否応なく遭遇する日々の「現実の問題」にこだわり、参加者とのやりとりの中で解決策を見い出すことに徹した故の、中央の民間教育運動からの距離に自覚的であった点が決定的に異なっていた。

ところで、なぜ発足から3年が経過した後に機関誌を発刊することとなったのか。1号のみの刊

表3 『たゝら』第1号（1957年2月22日）の構成と表紙

巻頭言 1. 子供の眼 2. 或る日の反省会 3. 教室二題（教師の作文） 4. 国語指導の力点—六年を担当するy君へ— 5. 数学学力テストについて 6. 親孝行について 7. 教室の記録 二つの失敗 アンケート「ことしの抱負」 8. 特別寄稿 茂と木の芽 9. 雪 10. 或る日の職員会から〈優等賞是非論をめぐって〉 11. 子どもの作文 12. “鉤虫（十二指腸虫）たいじ、から 13. 私の思ったこと、考えること 14. “たたら、までの道I 編集後記 「『川口教師の会』のきまり」	新井勘作（十二月田小） 飯塚昭雄（飯仲小） 清水義明（芝小） 新井忠雄（飯仲小） 高橋和子（上青木中） 板倉三重（芝中） 斎藤晴雄（飯仲小） 前原忠吉（飯仲小） 篠崎久（青木北小） 逸見英子（芝小） 鈴木久子（青木南小） 大和秀子（飯仲小） 福田トシ子（芝小） 斎藤晴雄（事務局）
---	---



【備考】川口教師の会『たゝら』第1号（1957年）より作成。

行で終わったことから、また斎藤晴雄「たたら、までの道Ⅰ」で川口教師の会のこれまでの活動の歴史を跡づけていることから、おそらくは1955年に埼玉教育研究サークル連絡協議会が発足し、他の様々なサークルと交流する機会が増え、川口教師の会の活動を紹介する必要性が生じたためと思われる。

最後に、埼玉教育研究サークル連絡協議会の活動について触れておきたい。同会の結成は、川口教師の会の新井、斎藤の呼びかけによるものであった。その主旨は、「気軽にさそえ、出かけられる感激的な集会がもたれることが多くの教師のために大切」「各地域の教育を下から支えていくことのために、民間教育団体（地域の教育サークル）は横に広がることの契機をもっと大切にしなければならない<sup>78)</sup>」というものである。つまり、より強力な運動体を目指した組織づくりではなく、川口教師の会発足の趣旨と同様に、横につながり刺激し合う仲間づくりを志向するものであった。埼玉教育研究サークル連絡協議会は、各サークルの研究交流や記録の交換、合宿や集会等、参加者の交流を中心的な活動とした、いわば大きなサークルである。当然のことながら、事務局を務めた川口教師の会は埼玉教育研究サークル連絡協議会の企画・運営に深く関わることになる。その意味でこれらの活動も、川口教師の会の活動の一面として欠くことのできないものではある。ただし、埼玉教育研究サークル連絡協議会の活動として位置づけた方が適当である。稿をあらためて検討することにしたい。

## おわりに

以上、川口教師の会の発足の過程と活動内容を明らかにした。検討結果を整理するとともに、1950年代埼玉における教育研究サークルとしての、川口教師の会の意義について述べる。

埼玉県教育会は1947年に解散となり、以後、「教育研究と文化活動」も教組が担うこととなっていた。しかし、教育会の中央組織は解体したものの、郡市-班の研究組織は残存しており、県当局はこれに新教育運動以降の各教科別研究団体を加えて、一元的な教育研究体制を再建しようとした。1949年に県が、埼玉県教育研究団体連絡協議会を設立してからは、県下の研究団体は県の意向に沿う組織へと再編されていった。

また、1947年から1949年にかけて、県教組は県当局と激しく対立していたが、1949年8月の軍政部の圧力によって県教組の姿勢は軟化し、以後、県当局との「協調路線」に転換していく。一方、日教組では、1951年11月に最初の教育研究集会（教研集会）を開催し、以後、中央の指導の下で教育研究体制が強化されていく。

このような1950年代初頭の教育研究の状況を背景として、1954年、地域の教育研究サークルとして川口教師の会は発足した。官製的・半官製的な引きまわしや圧力に対峙するとともに、中央の民間教育団体の「下請け」「教科セクト主義」を排すること、教組の活動を「正しく発展させるために」こそ、地域の現実に即したサークル活動が必要である、との認識に立つものであった。また、川口プランの実践の中心人物の一人であった前原忠吉の生活教育実践とそれをめぐる論争、前原の学校経営や教員の主体性を削ぐ指導のあり方もサークルへの課題意識として存在した。この他、サークル結成は、10代、20代に偏った年齢構成の教員社会を反映したものであった。「孤立感」に悩む「若い人」の思いに応える、拠り所としても構想されていた。つまり、川口教師の会の結成は、1950年代初頭の教育研究状況への問題意識を土台に、教師の身近な実践上、職務上の問題を仲間とのやりとりの中で乗り越えようとするものであると同時に、「孤立感」を持つ若い

教師の拠り所とするものであった。サークルは、教育実践や職務に関わる教育情報の伝達・交流にとどまらない、「教育研究」を促す人的な関係基盤でもあったのである。

会の活動の基本は「話し合い」であった。教師の日常の職務の中から生じる悩みや課題に仲間とともに向き合う活動、自らの実践をある程度まとまった形で発表・討議する姿が認められた。また、話題の文献をめぐる、論議することもあった。特に国分一太郎『教師』をめぐる、教師のあり方について討議が重ねられ、参加者の教育現実の捉え方が深められていく様子も確認できた。

サークルのメンバーの多くは、民間教育研究団体に所属しており、県教組の一員でもあった。にもかかわらず、そのような既成の、中央の、大きな組織の論理では、現場で抱える一人ひとりの教員の抱える課題を克服することは困難であるとの認識に至ったのである。一人の教員としての生き方をまるごと受け止めることを目指して、その方法を手探りで見つけようと求めたのが、サークル活動であった。

1950年代以降の「文部省対日教組」という認識枠組の中に、また全国的な民間教育運動の意義を前提とする、「官と民」の構図の中に、その独自の機能と役割を埋没させてきた教育研究サークルの実態の一端を明らかにすることができた。

この後、地域教育研究サークルは、10年間、斎藤晴雄が運営の中心的な役割を果たした後、川口市教組の仕事の多忙化を理由に事務局を交代する。1960年代後半以降の川口教師の会の活動については、今のところ不明であるが、「サークルらしさ」としての「自発的性格」をサークル分析の視点とした時、その始まり方と同様に、終わり方に関しても解明の必要がある。この問題は今後の課題としたい。ただし、斎藤晴雄は「ここで培われた思想が、その後のさまざまな局面で僕自身の人生選択の根底になったと思っています。」と語っている<sup>79)</sup>。斎藤は60年代以降、川口市教組の活動にこだわり、教員の教育研究を支える事業に力を注いでいく。1968年に川口市教組に付属教育研究所を設置、1970年には川口市教組の教研の月例化を実現させる。その際にも「講師や問題提起者を安易に外部から招くのではなく、組合員自身が務めることです。それのできる人を川教組の中にどれだけつくりだすか、そこに命運をかけようと覚悟しました。」と述べている<sup>80)</sup>。教育研究サークルは、参加者の多くが20代の若年層によって担われた場であり、その後の地域に根ざした民主教育を支える担い手を輩出した人材育成の場として機能したのである。

## 註

- 1) 大田堯編『戦後日本教育史』(岩波書店、1978年)、p.241。同書では、民間教育運動として日本綴方の会(のちに日本作文の会)、教育科学研究全国連絡協議会、数学教育協議会などが取り上げられ、日教組では1951年11月から開始された教育研究集会に言及している。
- 2) 梶山雅史編『近・現代日本教育会史研究』(不二出版、2018年)。
- 3) 大槻健『戦後民間教育運動史』(あゆみ出版、1982年)、p.290。
- 4) 同上、p.291。
- 5) たとえば、白井嘉一「戦後社会科実践史における『上越教師の会』の位置と意義」(二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』学文社、2007年、第1章)。上越教師の会の前身は、1954年に発足した「若い教師の会」であるが、同書では発足の経緯や同会の活動は詳らかにされていない。
- 6) 埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第6巻(埼玉県教育委員会、1976年)、pp.325-328。
- 7) 川口市は1958年当時で、公立小学校数・教員数は20校・523人で県内2位の規模(大宮市21校・

- 555人、浦和市20校・493人、川越市17校・401人)であった(埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第7巻、埼玉県教育委員会、1977年、pp.881-908)。
- 8) 川口教師の会の機関誌『たゝら』(1957年)、同会の活動記録「話し合いの記録」(1955～1960年)、埼玉教育研究サークル連絡協議会の機関誌『あしなみ』(1955～1960年)。斎藤晴雄氏への聞き取りは、2012年9月18日、10月16日に、さいたま市の斎藤氏の自宅にて実施した。斎藤氏への聞き取りに関しては、「斎藤晴雄さんに聞く 子どもから出て子どもに還る—組合運動と教育実践の統一をめざして—(聞き手 児美川孝一郎・野々垣務)」(野々垣務編『ある教師の戦後史—戦後派教師の実践に学ぶ—』本の泉社、2012年)がある。同書は、2007年に実施した斎藤氏へのインタビューに基づいて、斎藤氏の受け持った子どもたちのエピソード、勤評闘争、組合活動の展開とともに、「地域サークルにこだわり続けて」の項で川口教師の会と埼玉教育研究サークル連絡協議会の活動について記されている。そこでは「中央志向を戒め、地域に根ざす姿勢」と活動の中心となった飯仲小の特質について述べられている。本稿は、この地域サークルの発足の経緯や活動について、聞き取りした内容に基づき、より詳細に解明するものである。
  - 9) 『埼玉県教育史』第6巻、p.369。
  - 10) 同上。
  - 11) 同上、p.379。
  - 12) 佐藤幹男『戦後教育改革期における現職研修の成立過程』(学術出版会、2013年)、p.156。前掲『埼玉県教育史』第6巻、p.401。第二次大戦後における教員研修制度に関しては佐藤の研究が詳しい。
  - 13) 前掲『埼玉県教育史』第6巻、p.391、pp.400-403。
  - 14) 同上、p.312。
  - 15) 埼玉県社会科研究会連合会の代表者村本精一は、戦前に梅根悟によって川口中学に「引き抜かれ」た教員である。川口プランの作成・実践に中心的な役割を担ったとされる(伏木久始「川口プランのカリキュラム開発プロセス」『信州大学教育学部紀要』第113号、2004年、p.143)。
  - 16) 前掲『埼玉県教育史』第6巻、p.315。
  - 17) 同上、p.312。
  - 18) 埼玉県教育局編『埼玉県教育要覧 1950年』(1950年、埼玉県教育委員会)。
  - 19) 埼玉県教育局編『埼玉県教育要覧 1953年』(1953年、埼玉県教育委員会)。
  - 20) 前掲『埼玉県教育史』第6巻、pp.316-317。
  - 21) 埼玉県教育局編『埼玉県教育要覧 1957年』(1958年、埼玉県教育委員会)。
  - 22) 埼玉県教育局編『埼玉県教育要覧 1958年』(1959年、埼玉県教育委員会)。
  - 23) 天野正子『「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平—』(吉川弘文館、2005年)、p.3。
  - 24) 鶴見俊輔「なぜサークルを研究するか」(思想の科学研究会編『共同研究集団—サークルの戦後思想史—』平凡社、1976年)。
  - 25) 鳥羽耕史「地図で見るサークル文化の勃興」(『週刊新発見 日本の歴史45現代5 戦後政治のダイナミズム』朝日新聞出版、2014年、pp.16-17)。
  - 26) 天野前掲書。
  - 27) 鶴見前掲書、p.3。
  - 28) 阪本博志は、勤労青少年によるサークルが全国で500以上存在したことを指摘している(「戦後日本における『勤労青年』文化」『京都社会学年報』第8号、2000年、p.101)。また、鳥羽前掲論文は、機関誌を発行した100を越えるサークルの存在を明らかにしている(「地図で見るサークル文化の勃興」『週刊新発見 日本の歴史45現代5 戦後政治のダイナミズム』朝日新聞出版、2014年、pp.16-17)。ただし、教師によるサークルや学校の職場サークルも数多く生まれ、機関紙も発行されているが、鳥羽が明らかにしたサークルの中には数えられていない。
  - 29) 西川祐子「サークル運動再考—鶴見和子文庫から—」(『戦後日本社会の歴史3—社会を問う人びと—』岩波書店、2012年、p.54)。

- 30) 増岡敏和『サークル運動入門』（東邦出版社、1974年）、pp.97-98。増岡は1928年広島市生まれ。戦後、広島県庁、国税局に勤め、のちに共産党広島県委員会オルグ、島根県平和委員会常任として活動した。短歌や詩などの文学サークルにおいて牽引役を果たした。
- 31) 同上。
- 32) 鶴見前掲論文、p.4。
- 33) 同上、p.4、p.6。
- 34) 同上、p.8。
- 35) 増岡前掲書、pp.28-33。
- 36) 富士原雅弘・布村育子「戦後初期日教組の史的動向—全国教研開催までの経緯とその背景—」（日本大学教育学会『教育学雑誌』第51号、2015年）。
- 37) 鳥羽耕史『1950年代—「記録」の時代—』（河出書房新社、2010年）、辻智子『繊維女性労働者の生活記録運動—1950年代サークル運動と若者たちの自己形成—』（北海道大学出版会、2015年）、西川前掲論文等。
- 38) 職場サークルにおける生活記録運動を通じて、女性労働者が成長する姿を描いた実証的研究として、辻前掲書がある。
- 39) 緑の会によるサークル運営の特徴については、緑の会編『サークル運動—その理論と運営の実際—』（文理書院、1956年）に詳しい。また、雑誌『人生手帖』を中心とする人生雑誌の意義に関しては、社会の変化や読者層の要求から解明しようとした福間良明『「働く青年」と教養の戦後史—「人生雑誌」と読者のゆくえ—』（筑摩書房、2017年）がある。
- 40) 天野前掲書、pp.12-13。
- 41) 斎藤晴雄「“たたら”までの道Ⅰ」（川口教師の会『たたら』1号、1957年）。
- 42) 同上。
- 43) 斎藤晴雄氏は、新井のことを「彼は理屈屋でね。」と述べている。斎藤晴雄氏からの聞き取り（2012年10月16日）。以下、斎藤晴雄氏からの聞き取りは「斎藤氏聞き取り（年月日）」と記す。
- 44) 同上。
- 45) 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。
- 46) 川口教師の会『たたら』1号（1957年）。
- 47) 斎藤氏聞き取り（2012年9月18日）。
- 48) 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。
- 49) 土岐兼房『生活綴方と共に』（創童舎、1987年）掲載の「土岐兼房年譜」（嶋祐三）による。「2.1ゼネスト」に関わる部分の引用は斎藤氏聞き取り（2012年9月18日）から。
- 50) 斎藤氏聞き取り（2012年9月18日）。
- 51) 同上。
- 52) 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。
- 53) 同上。
- 54) 前原について、「校長になった頃から、共著の本なんかあった人ですけど、校長になって、単著で明治図書から『生活する子どもの学校』[1955年刊行]っていう本を出したんです。これが校長名で、学校全体の実践を書いた本だから当然僕なんかも登場するし、巻末には全職員の名前がついている。ところが、そうやってできた本なのに、職員には金をとって販売したんです。みんなこうなっちゃって[がくっと]…。学校全体の実践をまとめて本にしたんならね、一緒に実践した人ぐらいにはね、タダで配るべきだと思う。売るとは何事だ」というようなことがあったという（斎藤氏聞き取り2012年10月16日）。
- 55) 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。
- 56) 同上。

- 57) 同上。
- 58) 斎藤氏聞き取り (2012年9月18日)。
- 59) 前掲『埼玉県教育史』第6巻、pp.236-237。「県教育研究所調査」による。
- 60) 同上、pp.234-235。『埼玉県教育要覧』による。
- 61) 同上、pp.236-237。
- 62) 『川口教師の会』のきまり」(前掲『たゝら』1号)。
- 63) 前掲『たゝら』1号。
- 64) 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。
- 65) 川口教師の会「川口教育懇談会“話し合いの記録”」第1号 (1955年7月)。司会の新井忠雄の発言。
- 66) 前掲『サークル運動—その理論と運営の実際—』において、浦和市西堀青年学級の「ロハ台」の話し合いの記録について紹介されている。同書からは、話し合い活動の難しさは、緑の会の各サークルでも共有されており、打開策が模索されていたことがわかる。「ロハ台」は実践の成功例として取り上げられている (p.130)。
- 67) 前掲「川口教育懇談会“話し合いの記録”」第1号。記録係の斎藤によるものと思われる。
- 68) 埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第3号 (1956年7月30日)、p.1。
- 69) 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。
- 70) 斎藤氏聞き取り (2012年9月18日)。
- 71) 川口教師の会「話し合いの記録」第12号 (1956年6月20日)、p.1。
- 72) 国分一太郎『教師—その仕事—』岩波書店、1956年。
- 73) 埼玉県川口教師の会「国分一太郎氏の『教師』〈その仕事〉をめぐって わたくしたちはこう学んだ」(『カリキュラム』第92号、1956年10月、誠文堂新光社、p.80)。
- 74) 斎藤氏聞き取り (2012年9月18日)。
- 75) 前掲「国分一太郎氏の『教師』〈その仕事〉をめぐって わたくしたちはこう学んだ」p.81。
- 76) 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。この他、「芥川賞をとった石原慎太郎の『太陽の季節』なんていうのを取り上げて、やったこともあります。さすがにその時は誰も記録を取らなかったけどね[笑い]。大いに共感するって奴と、ふざけんじゃねえってのと。」のように、「問題作の書評的な話し合い」もあった (同聞き取りから)。
- 77) 大田前掲書、pp.243-244。
- 78) T・A「みんなの集りに」(埼玉教育研究サークル連絡協議会『サークル通信 (仮称)』第1号、1955年12月、p.1)。「T・A」は新井忠雄。同誌の誌名は第3号から『あしなみ』になる。
- 79) 野々垣前掲書、p.200。
- 80) 同上、p.201。

#### 謝辞

本稿に関わる史料の調査・収集に際して、斎藤晴雄先生、斎藤礼子様、山口和孝先生、さいたま教育文化研究所の先生、職員の方々にたくさんのご配慮を賜った。特に、斎藤晴雄先生にはご病気にもかかわらず、長時間の聞き取りに御協力いただくとともに、川口教師の会の機関誌等の貴重な史料を閲覧させて頂いた。本稿を直接お届けできなかったことが悔やまれる。この場を借りて心から御礼申し上げる。

(2019年9月30日提出)

(2019年10月10日受理)